

目 次			
ナス養液栽培における増収技術	・・・ 1	ニホンナシ「凍夏」、「あきづき」における新樹形の開発	・・・ 4
非辛味シシトウの品種開発	・・・ 2	ティーバック用製茶法の開発	・・・ 5
キュウリ養液栽培による早進化多収生産技術の確立 ～ハイワイヤー栽培の検討～	・・・ 3	輸出用ダリアの品質保持技術	・・・ 6

ナス養液栽培における増収技術

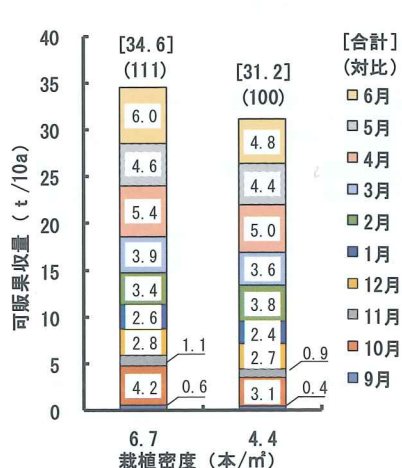


図1 栽植密度が可販果収量に及ぼす影響 (2017)

注 1) 調査株数は各区8株 (4株×2反復)。
2) 可販果収量はJA高知果出荷規格のA品とB品の合計。
3) 各区とも2本仕立てV字誘引、1芽切り戻し。
4) 0内の数字は4.4本/m²を100とした比。

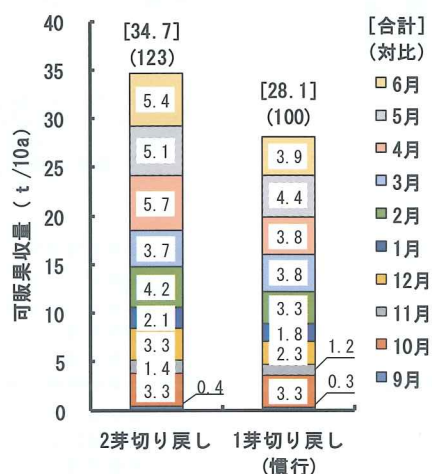


図2 整枝方法が可販果収量に及ぼす影響 (2017)

注 1) 調査株数は各区8株 (4株×2反復)。
2) 可販果収量はJA高知果出荷規格のA品とB品の合計。
3) 各区とも2本仕立てV字誘引、栽植密度3.3本/m²。
4) 0内の数字は慣行を100とした比。

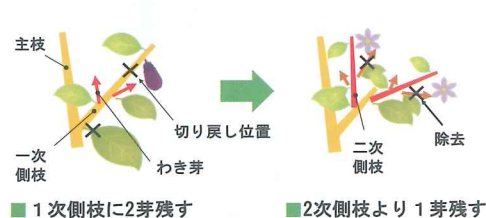


図3 ‘2芽切り戻し’ 整枝方法模式図



写真1 ‘2芽切り戻し’の様子

当センターでは、これまで炭酸ガス施用や、温度管理、養液栽培に適した台木による増収技術を検討してきました。今回は更なる増収にむけ、養液栽培における栽植密度および整枝方法の違いについて検討しました。

穂木には県育成品種‘土佐鷹’、台木にはオランダの強勢トマト台木‘エンペラール’を用いました。

栽植密度を6.7本/m²とすると、4.4本/m²と比べ可販果収量は11%多い34.6 t/10aとなりました(図1)。

また、栽植密度3.3本/m²とし、整枝方法

を1次側枝の果実直下の芽を除去せず2芽を残し、2次側枝より1芽切り戻しをする‘2芽切り戻し’整枝方法(図3)では、慣行の側枝1枝に1果着果させ、果実直下の芽を除去する‘1芽切り戻し’整枝方法に比べて、可販果収量は23%多い、34.7t/10aとなりました。

今後は、更なる増収を目指し、草勢に応じた環境管理や、ハイワイヤー誘引栽培における生育、収量特性調査を行う予定です。

(先端生産システム第一担当 浅野雄大

088-863-4918)